

## 福岡県における占領期の保育(3)

清原みさ子\*<sup>1</sup>・豊田和子\*<sup>2</sup>・寺部直子\*<sup>3</sup>・榊原菜々枝\*<sup>4</sup>

### 1. 研究の目的と概要

「福岡県における占領期の保育—保育先進県における戦後保育構築に関する実証的研究」(平成23～25年度、科学研究費基盤研究(C)23531075)による一連の研究で、本論集第62号では保育所普及の先進県の一つである福岡県で、戦後の保育所の状況を明らかにすることを通して、子どもを守る上で保育所が果たした役割を検証した。その中でもふれたように、福岡県は託児所、保育所普及の先進県であったが、幼稚園の普及状況は全国的にみて低調であった。大正時代の小学校入学者の幼稚園修了率をみると<sup>1)</sup>、大正2(1913)年に0.6%、大正15年でも1.2%であった。この年の全国平均は3.6%であったので、その三分の一でしかなかった。大正14年の「全国幼稚園ニ関スル調査」によると、福岡県の幼稚園数は25であった<sup>2)</sup>。

昭和に入り、福岡県の幼稚園修了率は上昇していき、12(1937)年に3.4%、18年に6.4%となるが、全国平均も上がっていたので、やはり低い状況が続いていた<sup>3)</sup>。

この傾向は、「2」で述べるように、戦後の昭和20年代にも続いていた。しかし、幼稚園への社会的関心がなかったわけではなく、昭和20年代の前半にも福岡県内の地方新聞等に、関連記事が掲載されていた。「幼稚園長にも確認書が要る」(毎日新聞、昭和22年6月3日付)、「幼稚園にも新教育」(筑後川新聞、昭和22年8月30日付)という記事や、「甘木町幼稚園(新発足)」したが「経営難」(朝倉新聞、昭和24年3月10日付)と、園児を集めるのが難しかった様子や、小倉幼稚園の「入試風景」(夕刊フクニチ、昭和24年3月27日付)が紹介され、同時期でも、地域によっ

ては多くの園児が集まっていた様子がわかる記事が、紹介されていた。

昭和20年代の後半になると、幼稚園への関心は広がっていく。地域にモデル幼稚園を作る動きや、小学校に附設(空き教室を使用)することが話題に上る。20年代も終わりになると、ベビーブームと景気の回復で、幼稚園への入園希望者が増える。幼稚園が狭き門で、入園が困難な状況が報じられていた。

本論文では、昭和20年代の幼稚園の園数、幼児数についてふれた後、こうした状況下で、保育の実際がどのようなものであったのかを明らかにする。その上で、保育所との比較を含め、考察を述べる。

研究の方法としては、まず、昭和25年以前に開設されていて現存する幼稚園を、『福岡県私立学校総覧』(県政タイムス社編、福岡県学校総覧刊行会、1958年)や『30年のあゆみ』(北九州私立幼稚園連盟30年のあゆみ編集委員会編、北九州私立幼稚園連盟、1976年)、福岡県私立幼稚園振興協会発行の名簿等を基に確定しながら、郵送および電話で資料が有るかどうかが、当時を知る人がいるかどうかを尋ねた。その結果、資料収集ができたのは17園、そのうちの7園では聞き取り調査を行うこともできた。ここでは、「園の沿革」「園児と教師の数、教師の資格」「園舎・園庭の状況」「保育の内容」に分けて、分析する。

17園の概要は、次頁の表1のとおりである。

表1 訪問園の概要

幼稚園名	所在地	訪問年月	内容
福岡	福岡市	2012.11	聞き取りと資料
舞鶴	福岡市	2010.7	資料
恵泉	福岡市	2012.11	聞き取りと資料
大濠聖母	福岡市	2012.11	聞き取りと資料
聖愛	福津市	2012.9	資料
小倉	北九州市	2013.2	資料
栄美	北九州市	2013.2	聞き取りと資料
明泉寺	北九州市	2012.9	聞き取りと資料
戸畑天使園	北九州市	2012.9	資料
愛光	北九州市	2013.2	資料
神愛	北九州市	2012.9 2013.12	聞き取りと資料
日善	久留米市	2013.9	資料
聖心	久留米市	2012.8	資料
聖母	久留米市	2012.8	資料
大牟田天使	大牟田市	2012.9	資料
めぐみ	大牟田市	2013.9	聞き取りと資料
光の子	大牟田市	2012.7	資料

(清原みさ子)

## 2. 昭和20年代の幼稚園の概況

昭和20年代の福岡県の幼稚園の数は、表2のとおりである。

また、幼稚園の幼児数と教師数は表3のとおりである。

地域別に、昭和23年、昭和28年の幼稚園・保育所の数を比べると、表4のようになる。

表2 昭和20年代の幼稚園の数

昭和	幼稚園		
	公立	私立	合計
23	1	24	25
24	1	30	31
25	1	36	37
26	1	42	43
27	2	50	52
28	5	66	71
29	—	—	120*

(『福岡県統計年鑑』より作成。\*印は文部省『日本の教育統計 新教育の歩み』による。)

表3 昭和20年代の幼稚園の教師数と園児数

昭和	教師数	幼児数		
		総数	男	女
23	116	2,885	1,456	1,429
24	147	3,988	1,986	2,002
25	164	3,503	1,817	1,686
26	204	4,426	—	—
27	300	7,088	3,641	3,447
28	425	10,514	5,419	5,095

(『福岡県統計年鑑』より作成)

表4 昭和23・28年度の地域別の幼稚園・保育所の数

	昭和23年度		昭和28年度	
	幼稚園	保育所	幼稚園	保育所
総数	25	141	71	388
市部	19	68	60	140
割合	76%	48%	85%	36%
福岡市	6	13	13	29
若松市	1	5	2	8
八幡市	—	6	8	14
戸畑市	2	3	3	5
直方市	—	3	3	3
飯塚市	—	6	1	11
久留米市	4	5	6	8
大牟田市	1	9	6	23
小倉市	1	9	10	13
門司市	—	4	7	10
田川市	4	5	1	11
柳川市	—	—	—	5
郡部	6	73	11	248
割合	24%	52%	15%	64%
粕屋郡	—	1	—	16
宗像郡	—	1	1	4
遠賀郡	—	11	1	16
鞍手郡	—	3	—	13
嘉穂郡	—	19	1	27
朝倉郡	—	2	—	15
筑紫郡	1	2	3	16
早良郡	—	1	—	5
糸島郡	2	2	2	8
浮羽郡	3	3	1	14
三井郡	—	6	—	20
三潞郡	—	1	—	10
八女郡	—	3	1	16
山門郡	—	1	1	14
三池郡	—	—	—	—
企救郡	—	—	—	—
田川郡	—	4	—	25
京都郡	—	4	—	7
築上郡	—	9	—	22

これらをみると、昭和20年代は、幼稚園の数は保育所に比べるとかなり少なかったことがわかる。その数少ない幼稚園は、昭和23年には全体の76%、28年には85%が都市部にあり、保育所が23年には、都市部と郡部でほぼ同数、28年には64%が郡部であったのと対照的である。

また、公立の幼稚園の数が極端に少なく、昭和26年までは、小倉市立の幼稚園が1園あるのみであった。

保育所に在籍する乳幼児数は、昭和28年12月末で、定員が28,819名に対して、実際に在籍しているのは、40,270名と定員を大幅に超えていた。

昭和30年度の5歳児の幼稚園就園率は、全国平均が21.8%であったのに対し、福岡県では16.3%であった。

(寺部直子)

### 3. 幼稚園の状況

#### (1) 園の沿革

調査対象の17幼稚園の開設時期は、明治期が2、大正期が2、昭和の戦前期が8、そして戦後が5という状況であった。また、設立母体に関しては、キリスト教が12、仏教が2で、その他が3であった。全体的に歴史的に古い園が多く、キリスト教の園が多いという傾向があった。

表5 訪問園の設立年と設立母体又はその宗教

園名	設立年	設立母体
小倉	明治23年	地域有志
福岡	明治36年	篤志家
舞鶴	大正2年	キリスト教
日善	大正4年	キリスト教
栄美	昭和4年(保育園)	地域有志
聖心	昭和5年	キリスト教
恵泉	昭和6年10月	キリスト教
大濠聖母	昭和7年(幼児園)	キリスト教
明泉寺	昭和8年	仏教
戸畑天使園	昭和8年	キリスト教
大牟田天使	昭和8年	キリスト教
聖母	昭和12年(託児所)	キリスト教
聖愛	昭和22年	キリスト教
光の子	昭和24年2月	キリスト教
愛光	昭和24年4月	仏教
めぐみ	昭和24年4月	キリスト教
神愛	昭和24年9月	キリスト教

以下、園ごとに沿革を記述する。

小倉幼稚園は、明治23(1890)年4月に私立「共立幼稚園」として開園された。小倉高等小倉長であった杉山貞が初代園長を兼任していた。明治31年4月に室町尋常小学校の一部に移転、同校の附属幼稚園となり、園名を「室町尋常小学校附属幼稚園」と改め、私立から町立に移管した。続いて明治33年4月の市政施行に伴い、町立から市立に変更された。明治44年には室町尋常小学校より分離して「堺町第二小学校『跡』」に移転し、「市立小倉幼稚園」と改名し独立した。昭和8(1933)年11月に園舎を改築した。戦時下にあっても昭和20年8月15日まで休園することなく保育を実施した。昭和25年10月に創立60周年記念式典を挙行了。昭和28年には入園希望者激増のため、公開抽選により入園を許可した。同年4月より1組増加して6組となり、年少組を廃止した。昭和29年には2組増加し、8組となった。

福岡幼稚園は、明治36年に少林寺境内の一隅で篤志家によって始められ、明治38年に認可された。その後、大正9年に福岡市大名町983番地(現在の赤坂1丁目)へ移転した。さらに昭和30年に、大名町97(現在の中央区大名2丁目12-5)へ移転し、五代目園長の田中利雄の私宅敷地に園舎が建設された。

舞鶴幼稚園は、大正2年11月12日に福岡市荒戸町で開園された。設置者は、アメリカ南部パプテスト宣教師社団法人であった。初代園長はグレース・H・ミルズで、3名の日本人保育者が、16名の園児の保育にあたった。大正10年に地行東町に移転した。昭和15年には「西南保姆学院附属実習園」となり、福永津義が園長となった。昭和16年には同系列の「早緑幼稚園」が鳥飼町に開設された。昭和21年には、舞鶴幼稚園を一時休園して孤児の保育を行った。昭和25年に「西南学院大学短期大学部児童教育学科附属幼稚園」として西南学院の組織に入った。翌年には、25年度卒園生を以て閉園した早緑幼稚園が舞鶴幼稚園に合併された。その時、鶴舞幼稚園は鳥飼町に園舎を新築して移転した。

日善幼稚園は、ルーテル派幼稚園として大正4年に設立された。昭和17年に休園となった後、昭和26年に久留米教会伝道開始五十周年記念事業の一環として再開する。この再開には、大川鉄次牧師と信者の木下勇が発起人となって「推進努力」した。この時、第三代園舎が教会員の労働と寄附金により建設された。

栄美幼稚園は、昭和4年に小倉市富野地区の有志により「栄美保育園」として設立された。昭和13年4

月に「栄美幼稚園」として認可され、初代園長は小学校校長で小倉幼稚園長を歴任した伊藤義路であった。

聖心幼稚園は、昭和5年3月19日に久留米市日吉町76番地の久留米カトリック教会の伝道所に設置された。設立者は福岡教区チリー司教、園長はメール・エピファニーであった。昭和6年10月に修道院敷地内に移転した。設立母体はイエズス修道会である。

恵泉幼稚園は、昭和6年に箱崎小学校近くの民家(当時、明治町永田氏宅)を借り、「箱崎幼稚園」という園名で10月に開園された。昭和11年に現在地に土地を入手して園舎を新築し、「箱崎恵泉幼稚園」と改名したが、昭和20年福岡大空襲のため、9月末にやむなく閉園した。昭和24年11月4日に福岡県より設置認可を受け、「宗教法人日本福音ルーテル箱崎教会附属恵泉幼稚園」と改名された。昭和28年に園舎を増改築した。

大濠聖母幼稚園は、当時、市内には幼稚園が少なく、カトリック精神に基づいた人間尊重の精神を基盤に明るく伸び伸びとした創造性豊かな人間に育つことを願って始められた。昭和7年に福岡市大名町のカトリック教会が、教会の敷地内に「福岡幼児園」を創り、これが「大濠幼稚園」の母体となった。カナダのカトリック修道会が一時携わっていたが、その後は聖母訪問会が運営を受託した。昭和8年にフランス人の宣教師アルベルト・ブルトン師によって、「大濠幼稚園」が設立された。昭和19年に「聖母愛児園」(戦後は引揚者などで親の育児が困難な子どもが預けられていた。迎えが遅い時はシスターが修道院に連れて行って面倒を見ていた。)が設立され、昭和53年まで大濠幼稚園と同一敷地内に隣接していた。

明泉寺幼稚園は、昭和8年5月に浄土真宗明泉寺の建立と同時に開園した。当初は、「幼稚園は裕福な家庭の子どもが行くところ」という世間一般の考え方があり、園児募集に大変苦労した。初代園長は鳥井暢起で、保育は園長の妻や、叔母が手伝った。戦時中は空襲警報が出ていても保育したが、戦争が苛烈となり一時閉園にした。父兄のたつての希望により、終戦1ヶ月後に保育を再開した。昭和27年に初代園長が他界し、妻の静江が二代目園長になった。

戸畑天使園は、昭和8年9月1日に、当時、カトリック戸畑教会主任司祭であったパリー外国宣教会アナトール・ヒューゼ師によって戸畑市千防町(現在地)に開設された。カトリックの愛の精神に基づく幼児教育を行うことにより、子どもの心身の発達を助成

することを目標とした。

大牟田天使幼稚園は、「昭和8年ブルトン司教により園舎が設立され天使園の誕生」に始まる。「お子供さん方の幸福のため、ふるつて御入園おすゝめ致します(中略)場所は安全お庭もひろし安心してお子供さんを遊ばせる事が出来ます 御迎へ御送り致します」という入園案内が作られ、主任の堤マツノ、信徒の町田フミらの熱心な園児募集により、46名が入園した。その翌年、ブルトン司教は常住できなかったため、ボンカーズ神父が園長となった。しかし、昭和20年には空襲が激しくなり、5月に閉鎖した。終戦後、町に疎開していた人が戻り、活気づいてきて幼稚園の必要性がでてきた。当時、園で働いていた主任の出町君恵が幼稚園認可をめざし、その手続きと開園準備に福岡まで足を運んだ。昭和23年に認可を受け、「大牟田天使幼稚園」と命名された。昭和25年にはスタック神父が園長に着任した。昭和28年には川口清が園長になった。

聖母幼稚園は、昭和12年9月に「聖母託児所」として設立された。教会の隣にあった伝道所を改造し、12人の子どもたちと始めたが、すぐに60人近くの子どもたちが集まった。同年10月3日の幼きイエスの聖女テレジアの日を創立の日とした。昭和21年に焼け残った園舎で保育を開始した。昭和22年8月に「聖母幼稚園」として認可された。昭和31年には新園舎が完成した。

聖愛幼稚園は、昭和22年に津屋崎教会に赴任したアゼリア・ピート宣教師と桑原牧師と安永圭(園医)とが神興小学校で農繁期託児所を開設したことに始まる。その後、昭和23年5月に幼稚園として認可され、現在地に移り、「日本基督教団津屋崎教会付属聖愛幼稚園」が宗像郡最初の幼稚園として創立された。

光の子幼稚園は、昭和23年に大牟田バプテスト教会総会で附属幼稚園の設立が話題になり、昭和24年2月に附属幼稚園を「光の子」と命名、個人立幼稚園として認可を受け設立された。初代理事長には村尾信逸(教会、幼稚園等の土地を寄付した信者で「看護婦学校」の経営者)が就任した。同年4月に園児34名で開園した。初代園長に松村秀一牧師が就任し、9月には同氏東京転任のあと、二代目園長に調正路牧師が就任した。調牧師が昭和27年6月に熊本教会の牧師として転出した後は、30年3月までの3年間、教会の牧師も幼稚園の園長も不在だった。その間は牧師館の留守番役として住んでいた教会・幼稚園の理事の川

勝夫妻が幼稚園の経営にも携わった。

愛光幼稚園は、昭和24年4月12日に福岡県教育委員会より認可を受けた。終戦後の荒廃した人心を憂い、幼児期からの宗教教育の必要性を痛感した三光寺住職の西明龍賢が本堂と日曜学校の校舎を開放し、個人立幼稚園として開園された。昭和25年に初代園長が逝去し、仁保尚晃住職が二代目園長に就任した。昭和30年8月に木造二階建ての保育室を本堂東側へ移動した。

めぐみ幼稚園は、昭和24年4月に地域の要望を受けて教会婦人会が中心となり開園された。園舎は旧教会と牧師館を使い、同年9月に認可を受けた、個人立園である。定員50名で、教会の主管だった榎本泰次牧師が園長の任に当たり、教職員は3名であった。

神愛幼稚園は、教会が先に出来ていて、昭和24年9月に「若松バプテスト教会附属神愛幼稚園」として園児募集を開始し、10月に開園された。翌昭和25年5月に認可を受け、10月には園舎が落成、献堂式が行われた。

(豊田和子)

## (2) 園児と教師の数、教師の資格

### 1) 園児と教師の数

詳細がわかったのは、めぐみ幼稚園、小倉幼稚園、舞鶴幼稚園、戸畑天使園、愛光幼稚園だった。以下、順に記述する<sup>4)</sup>。

めぐみ幼稚園では、昭和24年4月の入園児は42名で、「思いに勝る数であった」。卒園児数と教師数は表6のとおりである。

表6 めぐみ幼稚園の卒園児数と教師数

昭和(年)	男	女	合計	教師数
24	13	16	29	3
25	18	16	34	3
26	18	20	38	3
27	31	31	62	3
28	50	55	105	5
29	55	65	120	7

小倉幼稚園の昭和25年の定員は200名だった。満3歳より学齢始期までの幼児を受け入れ、年齢(生年月日)順に、5クラス編成していた。昭和28年には年少児の受け入れを中止し、昭和29年には1年保育のみとなった。入園希望者が殺到した為、公開での抽選で入園を決定した。幼児数は表7のとおりである。

表7 小倉幼稚園の幼児数

昭和(年)	男	女	合計
20	88	91	179
21	170	138	308
22	191	188	379
23	159	150	309
24	159	150	309
25	133	126	259
26	不明	不明	284
27	193	177	370
28	165	182	347
29	181	180	361

昭和20年代の教師数は、1～2名の教諭と2～3名の助教諭だった。

舞鶴幼稚園では、幼児数と職員数は表8のとおりである。職員数は、昭和26年までは舞鶴幼稚園と早緑幼稚園をあわせたものとなっている。園児の年齢は、満3歳から学齢までであった。

表8 舞鶴幼稚園の幼児数と職員数

昭和(年)	舞鶴	早緑	職員数
21	休園	26	3
22	25	30	3
23	35	43	3
24	39	50	5
25	31	63	9
26	45	78	9
27	73		9
28	77		12
29	102		10

戸畑天使園では、卒園写真から算出した幼児数と職員数は表9のとおりである。昭和24年、25年の職員には神父が含まれる。

表9 戸畑天使園の幼児数と職員数

昭和(年)	男	女	合計	職員数
24	61	53	114	8
25	56	58	114	8
26	97	72	169	不明
27	118	96	214	不明
28	不明	不明	不明	8
29	142	118	260	10

愛光幼稚園の卒園児数と教師数は、表10のとおりである。

表10 愛光幼稚園の卒園児数と教師数

昭和(年)	男	女	合計	教師数
24	25	25	50	3
25	35	25	60	5
26	38	29	67	8
27	62	57	119	7
28	85	61	146	5
29	不明	不明	145	5

栄美幼稚園では、現存する卒園アルバムの写真から算出した卒園児と職員数は次のとおりである。昭和16年3月は、卒園児数は69名(男36、女33)である。職員は、園長を含め3名だった。昭和29年3月は、さくら組が51名(男36、女15)、ゆり組は2枚の写真があり、合計75名(男42、女33)だった。まつ組も同様に2枚の写真があり、合計77名(男41、女36)であった。職員は、園長を含め4名だった。

恵泉幼稚園では、現存する写真から算出した卒園児数は、昭和20年は53名、21年は33名、22年は46名、23年は53名、24年は44名、25年は45名、26年は57名、27年は50名、28年は53名、29年は67名、30年は80名だった。

大濠聖母幼稚園では、現存する写真に写っている幼児数は、昭和10年～19年の戦前までは約30～80名程度であった。昭和22年は58名、24年は97名、25年は75名、26年は96名、28年は153名、29年は67名(卒園児のみ)、32年は64名(卒園児のみ)であった。

明泉寺幼稚園では、戦後は1クラス50名くらいの園児がいた。卒園児数は、昭和28年度は52名(男28、女24)、昭和29年度は64名(男38、女26)であった。

神愛幼稚園では、昭和24年の設立当時の幼児数は、64名で、職員数は5名であった。年長・年中・年少の3クラスあったが、一緒に保育した。

日善幼稚園では、幼児数は昭和26年度は27名で、その内、卒園児は13名(男6名、女7名)であった。卒園写真から算出した幼児数は、昭和28年度は47名(男25、女22)、昭和29年度は45名(男25、女20)だった。受け入れ対象年齢とクラス分けは、昭和26年度は年長が「みどり組」で、年中の「き組」と年少の「あか組」があった。職員の数、牧師夫人である園長の他に、主任と組担当が3名いた。

大牟田天使幼稚園では、幼児数は解明できなかったが、昭和28年の「スタック神父様とお別れ」の写真には、121名の園児が写っている。教職員の数は、園長と主任以外に、昭和20年度と23年度は1名、24年

度と25年度は2名、26、28、29年度は3名、27年度は4名だった。

聖母幼稚園では、卒園児数は昭和21年には34名(男子18、女子16)、昭和22年は89名、昭和23年は104名、昭和24年は126名に増加している。昭和25年に87名、昭和26年に70名、昭和27年に55名と減少するが、昭和28年は120名、昭和29年は145名というように第一次ベビーブームを背景に、大幅に増加している。

聖愛幼稚園では、昭和23年度の卒園児数は59名、昭和24年度は59名、昭和25年度は49名、昭和26年度は34名、昭和27年度は41名、昭和28年度は36名、昭和29年度は41名で、教師は4～5名だった。

光の子幼稚園では、昭和24年度第1回卒園児は34名、25年度は39名、26年度は40名、27年度は51名、28年度は41名、29年度は77名であった。受け入れ対象年齢とクラス分けの詳細は不明であるが、三年保育もあった。教師数は、27年頃は5名だった。

## 2) 教師の資格

キリスト教の幼稚園では、牧師、神父等が園長を兼務していたところが多い。教師は、西南学院(福岡幼稚園、栄美幼稚園、光の子幼稚園)や、聖和女子学院(恵泉幼稚園、めぐみ幼稚園)の出身者が多く、有資格者であった。頌栄短期大学出身者(大濠聖母幼稚園)もいた。福岡保育専攻学校や、京都、鎌倉、東京などの専修学校出身者もあり、大半が有資格者であった。

(榎原菜々枝)

## (3) 園舎・園庭の状況

ここでは、保育室の状況、戸外遊具・備品、室内遊具・備品について述べる。

### 1) 保育室の状況

最も詳細がわかったのは、小倉幼稚園だった。昭和8年に改築した園舎を昭和20年代も使用し、昭和46年まで使用していた。昭和25年の『小倉幼稚園概史』(以下『概史』)によれば、園の総坪は589坪、建坪171.25坪であった。保育室は5室(15坪が2、12坪が3)、遊戯室(40坪)、養護室(16坪)、体育館(48坪)、他に、職員室、応接室、使丁室、倉庫が3つあった。昭和28年に1クラス増やした時は、養護室を保育室にあて、29年に更に2クラス増加した際には体育館を保育室として使用していた。『概史』によれば、園庭は、417.75坪で、体育館の前に運動場、園舎と園舎の間に渡り廊下をはさんで中庭があった。ま

た、『調査書綴』の中にあった「幼年期に於ける教育の諸問題と振興策」という昭和30年頃の文書の中の図によれば、中庭の一方には花壇があり、反対側には、トンネルと滑り台のある築山があり、その上に東屋があった（築山は昭和32年に取り除かれた）。

栄美幼稚園は、園舎は平屋建てで、少し後に園児が増えて2階建てを建てた。2つの園舎の間の石畳の路地の左右に入口があった。戦前のアルバム（昭和13年度）にある大きな机は、大工さんに寸法をとってもらって、材料を取り寄せて作ってもらったという。

恵泉幼稚園の園舎には、ホールの他に台所と保育室が2部屋あった。2階には、職員と牧師家族が居住した。昭和36年頃、桜の木が植えられた。

大濠聖母幼稚園は、同一敷地内に修道院、愛児園、幼稚園の建物があり、修道院の1階にお御堂（聖堂）、幼稚園の遊戯室には舞台、庭にはルルトがあった。一時期は、園庭が柵で幼稚園用と愛児園用に仕切られていた。

明泉寺幼稚園は、開園時は寺院本堂を仮園舎として保育を行ったが、翌年に園舎1棟（2教室で27坪）を建設した。昭和25年には2階に2教室（36坪）を増築、階下は遊戯室とつないで49坪拡張した。27年に園舎1棟2教室と正面玄関を合わせて22坪を増築した。

めぐみ幼稚園では、旧教会堂と牧師館を園舎とした。教会に来ておられた方（他教派の方）から机や椅子が与えられたとの記述があった。

神愛幼稚園では、昭和28年に建て替えた園舎には、雨の日でも遊べるように長い庇があった。その庇は、透明度のある素材で、光が入るようになっていた。昭和28年には、8坪の保育室が増築された。同年には、園庭に西鉄電車の廃車2台を利用した木工室と粘土室、母の会から寄贈の2坪の人形の家が設置された。

日善幼稚園は、「園舎として、三間×四間の組み立て式家屋を田主丸より購入して牧師館の南側に北向きに建て会堂とつなぎ、裏の西島病院（現在の井筒屋駐車場）側に炊事場と便所をつくった。これが第三代園舎で、すべては教会員の労働と寄附金で建てられた」と記されている。大工や左官は親戚や知人で、瓦も親戚から購入した。「大工作業および左官作業の人夫役はすべて教会の青年が奉仕した。基礎のレンガは三本松公園の焼け跡から拾い集め、屋根葺きは捏ね土を皆で背負って屋根に上げ、ペンキを瞬間に塗りあげるなど、あっといううちに完成させた」。

大牟田天使幼稚園は、戦争中、園舎が有明商業女学校に校舎として使われ、保育は教会の聖堂で行われていた。昭和23年、市の区画整理のため現在地に移転した。当時園長だったマルタンが市役所と交渉して米軍払い下げのかまぼこ兵舎（トタンでできたかまぼこ型）を得ることができ、聖堂と幼稚園に利用した。見取り図によると昭和11年～20年までは、園舎は2階建てで保育室2室、職員住宅、玄関があり、隣に聖堂と司祭館があった。23年～30年までのかまぼこ型の園舎は、2階建てで保育室1室、園長室、祭壇、食堂、台所、応接室、倉庫の他に、平日は保育室、日曜日は聖堂として使用できる広い部屋があった。

戸畑天使園の園舎については、昭和20年の終戦時には、土台だけ残り、板切れ1枚もない状態であった。その年の11月には聖堂を修復して仮園舎として、疎開当時まで在籍していた園児たちの保育が再開された。その後、神父が県庁に行き兵舎払い下げを交渉、解体した兵舎の古材を荷馬車で運び、元の土台に合わせて園舎を建てた。昭和26年には木造2教室を建て、昭和28年には旧司祭館を改築して2教室と遊戯室にした。財政難の中、増改築を果たしたものの、つぎはぎ園舎であったため、雨漏りがひどくなった。昭和28年頃から鉄筋の園舎設立を切望し、資金集めに取がかかった。古新聞、空き瓶、鉄くず等の回収をはじめ、持ち寄り品や問屋から布地や下着等を取り寄せ、洋服や小物類のバザーを開き、入園金、卒園記念品代は全額、建築費に当てた。

光の子幼稚園は、教会堂を保育に使用していた。

愛光幼稚園は、開園当時は、本堂の一部を保育室にし、玄関をはさんで木造2階建ての保育室があった。昭和30年には、本堂の東側にその2階建ての保育室を移動し、職員室、トイレが増設された。

## 2) 戸外遊具・備品

最も多かった戸外遊具は、滑り台である。福岡幼稚園、栄美幼稚園、恵泉幼稚園、大濠聖母幼稚園、明泉寺幼稚園、めぐみ幼稚園、神愛幼稚園、小倉幼稚園、大牟田天使幼稚園、聖母幼稚園、光の子幼稚園の11園に設置されていたことが確認できた。めぐみ幼稚園と光の子幼稚園のは、木製滑り台、神愛幼稚園と大牟田天使幼稚園のはゾウの形をした滑り台だった。小倉幼稚園には滑り台が2台あった。

次に多かったのはジャングルジムで、福岡幼稚園、栄美幼稚園、恵泉幼稚園、大濠聖母幼稚園、小倉幼稚園、戸畑天使園、聖母幼稚園、聖愛幼稚園、光の子幼

稚園の9園にあった。小倉幼稚園と光の子幼稚園は、木製ジャングルジムだった。福岡幼稚園のジャングルジムは、「移転や戦火をくぐりぬけ、今も活躍中」とのことだった。

砂場は、福岡幼稚園、大濠聖母幼稚園、神愛幼稚園、小倉幼稚園、舞鶴幼稚園、光の子幼稚園の6園にあったことがわかった。

ブランコは、福岡幼稚園、恵泉幼稚園、小倉幼稚園、舞鶴幼稚園、戸畑天使園、聖母幼稚園の6園にあった。小倉幼稚園には、椅子ブランコもあった。

その他の固定遊具では、雲梯、鉄棒、太鼓橋、シーソー、遊動円木、回転椅子等があった。また、舞鶴幼稚園では、外で遊ぶおもちゃとして木製の手押し車が人気だった。教師が木製のビールの空き箱をもらって来て車輪をつけたものだった。小倉幼稚園には、玉入れ、梯子、ボール、縄跳び、じょろ、凧、羽根つき、ローラースケート、自動車、三輪車もあった。

### 3) 室内遊具・備品

室内遊具や備品の有無がわかったのは5園のみだった。福岡幼稚園、恵泉幼稚園、神愛幼稚園、小倉幼稚園にはピアノやオルガンがあった。神愛幼稚園には、その他に、太鼓、シンバル、トライアングル、カスタネット、鈴、笛(水笛)等の楽器があった。

最も詳細がわかったのは小倉幼稚園で、積木、ヒル氏積木、フレーベル恩物、絵具用筆・とき皿・金だらい、絵具クレオン(ママ)、ハサミ・キリ、空き箱、人形、大工道具、絵本、お手玉、魚釣り遊び、ままごと、粘土・粘土板、色紙・画用紙等があった。

その他には、福岡幼稚園には、紙芝居や松岡享子の名作絵本、神愛幼稚園には、「キンダーブック」や「子どものくに」、恵泉幼稚園には、「子どもの世界」、図鑑等があったことがわかった。

戦前からあり、焼失しなかった園には、さまざまな室内遊具や教材が準備されていたと思われるが、戦後に開園した園では戸外遊具や備品等が全くない状況から保育を始め、苦勞をした園も少なくない。

(豊田和子)

## (4) 保育の内容について

### 1) 幼稚園の一日の流れ

当時の幼稚園における一日の流れはどうであったか。聞き取り調査及び資料収集から、次の3園では、当時の様子が多少なりとも明らかになった。

恵泉幼稚園では、道草をしながら9時頃に登園を

し、お祈りをした。お花を見ながら外で礼拝をすることもあった。園長の聖話もあった。

神愛幼稚園では、朝9時頃、先生が門のところで待っていると、子どもたちだけで、徒歩やバスでやってくる。9時半か10時に礼拝をして、ちょっとしたカリキュラム(初めは作っていなかったけれど、簡単な時間の経過を書く)を作って、絵を描いたり、製作したり、歌ったり、自由遊びをしたりした。社会見学に出かけることもあった。持参したお弁当を食べ、少し遊んでから、心静かにして、13時半から14時にお帰りのした。

日善幼稚園では、毎日の保育は保育者が園児を誘いながら登園することから始まった。毎朝礼拝が行われた。園児・職員の回想の中に「お早うスキップ」をしたという記述がみられる。聖書のお話を手描きの紙芝居にした。毎朝の礼拝では、子ども讃美歌を歌った。そのタイトルは「主、我を愛す」などで、ネービー園長からは英語で習った。

### 2) 狭義の保育内容

保育内容について詳細がわかったところは、5園だけであった。

栄美幼稚園では、グッドモーニング、グッバイ等英語の歌を歌った。お弁当の時間には、園でおかずだけ持参していた。

恵泉幼稚園では、子どもの創造性を大事にし、自由保育で制作したものを展示した。ピアノの上手な先生は、リズム遊びをし、曲の感じに合わせて「風」など表現して走り回った。折紙など、同じ教材で同一テーマを行う一斉保育もしていた。絵の具を使って子どもの発想を引き出すように教材を工夫した。空き箱を園で集めて、製作をするなどしていた。絵本のないときは素話を行っていた。給食はなく、弁当を持参していた。用務員が掃除をし、教師は保育に専念できる環境があった。

神愛幼稚園では、みんなで考えたカリキュラムで、保育していた。1・2、1・2とか、1・2・3とかリズム打ちで、レコードはかけずにピアノを用いた。LP盤のレコードで、朝の情景や森の情景、マーチを聴いた。お絵かき帳はなかったが、画用紙はあって、絵には力をいれていた。

舞鶴幼稚園では、素足の保育が行われていた。カリキュラムの中におみせやさんごっこもあり、その記録帖も作成していた。

大牟田天使幼稚園では、昭和26年頃には、1人でバ

スに乗って通園していた子どももいた。下車を間違えないよう緊張していたが、園に着き教師の顔に接すると、安堵感でにっこりほほ笑んだ。また、徒歩通園の園児たちは、草花と虫に目を奪われて道草しながら登園していたとの記録が残っていた。また、昭和27～28年頃に園児だった人の記録によると、当時は、家庭でもマリア様の写真を貼り、お祈りをするような指導が行われていた。冬になると保育室に大きな石炭ストーブが焚かれ、その周辺に弁当を並べ暖められるようになっていた。

また、特色ある保育としては、明泉寺幼稚園では、全園児を対象にしているわけではないが、バレエ部があり、博多から講師を招いた。昭和27年にはバイオリン部もでき、同年「バイオリン部発表会」が行われた。

### 3) 行事について

行事について少しでも様子がわかったのは、めぐみ幼稚園、聖心幼稚園以外の15園であった。最もよく行われていたのは運動会で、12園だった(福岡幼稚園、栄美幼稚園、大濠聖母幼稚園、明泉寺幼稚園、神愛幼稚園、小倉幼稚園、日善幼稚園、大牟田天使幼稚園、戸畑天使園、聖母幼稚園、光の子幼稚園、愛光幼稚園)。運動会の内容としては、かけっこや遊戯、玉入れ、リボンダンス等が行われていた。栄美幼稚園の運動会では、「綱引きの綱は、お父さんたちが、米をとった後の藁をなべて作ってくれた。玉ころがしはお母さんが真剣になっていた。時には、相撲を取ることもしましたが、それは喜んだ。砂を入れてちゃんと土俵をつくってやった。」とのことだった。

次に多かったのはクリスマス会で、11園で行われていた(福岡幼稚園、栄美幼稚園、恵泉幼稚園、大濠聖母幼稚園、神愛幼稚園、舞鶴幼稚園、日善幼稚園、戸畑天使園、聖母幼稚園、聖愛幼稚園、光の子幼稚園)。この数字は、今回の調査対象としてキリスト教の幼稚園が多かったことにもよると考えられる。

遠足や雛祭りも多く園で行われていた。遠足の行先は、到津遊園や太宰府があげられていて、母親をはじめ保護者も同行した園が多かった。その他には、入園式、参観日、七夕、芋ほり、お彼岸、花祭り、降誕会、報恩講、七五三、映写会、園外保育、野外保育、お別れ音楽会等が行われていた。

ここで、行事について最も詳細がわかった小倉幼稚園の場合を例として挙げる。毎年、取り入れられた行事は、年長組始業式、入園式、春の遠足、参観日、七

夕祭、運動会、野外保育(「観察」の虫とりや「見学」の市場見学等)、映写会(「シンデレラ」他)、4月入学児の小学校一日入学、お別れ音楽会、卒園式であった。これらに加えて昭和28年度には、10月に小倉市内のアメリカ人向けの幼稚園(アメリカキンダーガーデンと記録にはある)との交歓会が行われ、園児がアメリカキンダーガーデンを訪問し、翌年の七夕祭には、「アメリカキンダーガーデンから児童幼児を迎え親交をはかる」との記述があり、10月末には「北方アメリカキンダーガーデンよりハローウィンに招待。園児二十名、園長、黒木先生引率」との記述がある。さらに12月にも「アメリカ幼稚園招待交歓保育」との記録がある。

(榎原菜々枝)

## 4. 考察

保育理念、施設・設備、保育の内容等について、昭和20年代の幼稚園の状況を明らかにしてきた。保育所の状況とも比較しながら、考察していく。

初めにも述べたように昭和20年代前半には、福岡県の幼稚園は、保育所に比べ圧倒的に少なかった。例えば、昭和23年に、保育所が公私あわせて141あったのに対して、幼稚園はわずか25しかなかった。昭和28年には、保育所が388、幼稚園は71と、数は少ないものの、増加率としては、3倍弱と同様の増え方をしており、29年になると保育所が419<sup>9)</sup>と前年比で、1.08倍なのに対して、幼稚園は120と1.7倍と急激に増加している。このような差は、昭和20年代前半では、保育所へは共同募金やララ物資等の資金や物資の援助があったが、幼稚園には特になかったことから、経営を成り立たせる事が難しかったためだと考えられる。昭和27年以降は、社会情勢も安定し、ベビーブームの幼児たちが就園の年齢を迎えたこともあり、公立の幼稚園も出来はじめ、数が増加していった。

今回対象になった昭和25年までに開設された幼稚園は、17園中12園がキリスト教の団体を母体としており、保育所の設立母体は寺院をはじめさまざまであったこととは異なっていた。

保育時間には、幼稚園と保育所とは、当然のことながら、違いがみられた。幼稚園で、登・降園時間がわかったところでは、保育時間は5時間ほどであった。保育所の方が長かったが、それでも一日の保育時間は7時間くらいのところが多く、今と比べると長時間保育ではなかった。必要な子どもには、園長等が個別に

対応していた。

行事に関しては、幼稚園でも最もよく行われていた運動会は、保育所でも最もよく行われていた。幼稚園では、次いでクリスマスが多かったが、これはキリスト教の幼稚園が対象として多かったことによる。遠足や雛祭りが比較的よく行われていたことも、幼稚園、保育所共通である。行事の内容に関しては、運動会でかけっこや遊戯、玉入れ等は幼稚園、保育所どちらでも行われていた。キリスト教の幼稚園では、リボンダンスも行われていた。遠足の行先については、幼・保どちらでも到津遊園や太宰府があげられていて、母親、保護者も一緒のところが多かったようである。

施設・設備の戸外遊具では、幼稚園では滑り台とジャングルジムが同数で1位、ブランコと砂場が同数で3位であった。保育所では多い順にブランコ、滑り台、ジャングルジム、砂場であったので、その順序には違いがあるが、多い4種類は同じであった。室内のピアノやオルガンに関しては、幼稚園、保育所ともどの園にもどちらかがあった。幼稚園ではピアノの方が多かったが、保育所ではピアノは1ヵ所のみであった。遊具や教材に関しては、幼稚園、保育所どちらにも、なくて入手が困難だったところがあり、個々の差が大きかったようである。

占領期を中心にした昭和20年代には、保育所は文字通り子どもの命を守り、保護者が仕事をして生活していくことを支えていたが、ただ単に預かればよいというのではなく、保育・教育を充実させる努力が、早い時期からなされていた。幼稚園では、昭和20年代も後半になると、徐々に世の中も落ち着いてきて、子どもに就学前教育を受けさせたいと願う保護者も増え、第一次ベビーブームとも相まって、クラス増をして要望に応じる努力をした園が多くみられた。地域によっては、保育所が就学前教育への要望に答えていた。

園の設立・運営に関わる人々の個人的な努力や工夫で、保育の質の確保が図られていた。保育・幼児教育に携わるには、こうした熱意が基本にあるべきことを、改めて痛感させられた。

私たちのグループでは、以前、昭和20年代を中心に名古屋市における戦後保育史の研究に取り組み、まとめてきた<sup>6)</sup>が、名古屋市では、対象となった幼稚園13園のうち、キリスト教の幼稚園は3園で、仏教が7園で、キリスト教は少数であった。これには、保育者養成も関わっていると思われる。福岡では、キリス

ト教の戦前からあった西南保姆学院、戦後の福岡保育専攻学校が中心的役割を担っていたのに対して、名古屋では戦前からの柳城保姆養成所のほかに、名古屋市保育養成所が昭和21年に開設され、23年にはいち早く就業期間2ヵ年の名古屋市立保育専門学園になったことも関連していると思われるが、この点を含め比較検討することは、今後の課題としたい。

(寺部直子・清原みさ子)

## 注

\*1 愛知県立大学教育福祉学部名誉教授 \*2 桜花学園大学保育学部教授 \*3 桜花学園大学保育学部非常勤講師

\*4 名古屋短期大学助手

- 1) 日本保育学会『日本幼児保育史 第三巻』、フレーベル館、1969年、27～28頁。
- 2) 文部省普通学務局『全国幼稚園ニ関スル調査』、1925年、1～2頁。
- 3) 日本保育学会『日本幼児保育史 第四巻』、フレーベル館、1971年、15～17頁。
- 4) ここで記述する園の順序は、科学研究費報告書『福岡県における占領期の保育—保育先進県における戦後保育構築に関する実証的研究』で用いた順序(聞き取りができた園と資料のみの園に分けて、設立の早い順)による。
- 5) 福岡県保育所連盟『福岡県の保育事業の概況』、1959年、4頁。
- 6) 清原みさ子・豊田和子・原友美・井深淳子『戦後保育の実態 昭和30年代はじめまでの名古屋市の幼稚園・保育所』、新読書社、2003年。

## 参考文献

- 福岡県総務部統計課『昭和二十三年度 福岡県統計年鑑』、1949年、10月
- 福岡県総務部統計課『昭和二十四年度 福岡県統計年鑑』、1950年、6月
- 福岡県総務部統計課『昭和二十五年度 福岡県統計年鑑』、1951年、6月
- 福岡県総務部統計課『昭和二十六年度 福岡県統計年鑑』、1952年、6月
- 福岡県統計協会『昭和二十七年度 福岡県統計年鑑』、1953年、10月
- 福岡県統計協会『昭和二十八年度 福岡県統計年鑑』、1954年、10月
- 福岡県統計協会『昭和二十九年度 福岡県統計年鑑』、1955年、10月
- 栄美幼稚園『思い出—1954—』(昭和28年度卒園アルバム)

福岡県における占領期の保育(3)

ム)

『明泉寺幼稚園・創立70周年 第二明泉寺幼稚園・創立35周年記念誌』、明泉寺幼稚園、2002年

『大牟田正山町教会誌 創立80周年記念1972』、1972年  
大牟田正山町教会『シャローム 創立100周年記念誌 1992』、1992年

「若松バプテスト教会附属神愛幼稚園創立50周年記念式典」1999年

北九州市立幼稚園長会『幼稚園のあゆみ』、1978年

市立小倉幼稚園『小倉市立小倉幼稚園概史』、1950年

北九州市立小倉幼稚園創立九十周年記念行事実行委員会『小倉幼稚園九十年のあゆみ』、1980年

北九州市立小倉幼稚園創立百周年記念行事実行委員会『小倉幼稚園百年のあゆみ』、1990年

舞鶴幼稚園『まいづる創立80年誌』、1993年

舞鶴幼稚園『まいづる創立100年誌 ひかりの子として

あゆみなさい』、2013年

日善幼稚園『雲の柱 火の柱 日善幼稚園八十年誌』、1998年

久留米信愛女学院幼稚園『35年の歩み』、1995年

『学校法人 久留米信愛女学院 創立50周年記念誌』、久留米信愛女学院、2010年

天使幼稚園『創立50周年の歩み』、天使幼稚園、1998年

戸畑天使園『創立50周年記念誌』、1982年

聖母幼稚園『七十年の歩み』、2008年

大牟田バプテスト教会『大牟田伝道70年のあゆみ』、1981年

学校法人大牟田バプテスト学園光の子幼稚園『50年のあゆみ』、1999年

愛光幼稚園『わーい みんなあそぼう 愛光幼稚園創立50周年記念誌』、1999年